

日米の女子大学生によるジェンダー問題とフェミニスト概念に関する認識

リリアン・アズベリ

カリフォルニア州立大学モントレイ校

要旨

フェミニズムとは、性別間の平等に基づく政治的・経済的・社会的な平等の理論、又女性の権利や利益向上のための組織的運動などの総称である。フェミニズムはアメリカでは社会に広く浸透し率直に議論されているが、日本のフェミニズムは一体どのような特徴がありどのような状況に置かれているのか。この研究では、日米の女子大生はフェミニストに対してどのような認識を持っているのか、また日米両国では女性がどのような問題に直面するのか、について調べてみた。日本とアメリカの女子大生各30名ずつを対象に行ったアンケート調査の結果、日本の学生はフェミニストに対しては肯定的な意見を持っているが、その活動の効果は日常生活にはまだ反映されていないと知っていることがわかった。その反面、アメリカではフェミニストに対してのイメージは否定的だったが、その活動に関しては女性の立場の向上には大切であると思っていることがわかった。社会で女子大生が直面する平等問題として、日米の学生ともに社会での男女平等性は十分ではないという見解を持っているようだ。特に両国の女子学生は職場での平等性と育児休暇権に関する意識が高い。日本の学生の場合は性と生殖に関する権利に対する認識はあまりないが、アメリカの学生の認識は非常に高い。さらに、アメリカの学生は男女平等の権利に関して日常よく話す機会があるようだが、日本の女子学生はあまり話さないことがわかった。

はじめに

フェミニズムはアメリカで依然として広く議論されている問題である。しかし、日本ではどうであろうか。フェミニズムの問題は、文化が違う女子大生にはどのように影響を与えているのか。フェミニズムにはいろいろな問題があるが、その中でも四つの問題は現在でも特に重要であると言える。その四つとは：選挙権、政府への女性議員の進出、職場での平等権、生殖に関する権利である。

この研究では、日米の女子大生にフェミニズムの認識について質問し、両国でフェミニズムがどのように認識されているのかについて調べてみたいと思った。

1. 研究の重要性

なぜこの研究課題にしたかという、私は「ガールパワー」時代に育ち「女性は何だってできる」というフェミニストのアイディアに触れることができたのが最初の理由である。しかし、日本に留学している間、日本でのフェミニストの概念に関して疑問を持った。日本の女性はフェミニストについてどのように認識しているのか、そして社会でどのような問題に依然として直面しているのかについてもっと深く知りたいと思いこの研究をすることにした。

2. 研究質問

1. 女子大生はフェミニズムについてどのように認識しているか。
2. 社会で女子大生が直面する平等の問題とは何か。

3. 研究背景

3.1 「フェミニズム」の定義

フェミニズムには三つの概念がある。一つ目は女性の歴史的な搾取、抑圧を認識し普及する必要性、二つ目はすべての性別や団体の平等に向けて働きながら女性の社会的地位を向上させるという目的があること、最後は伝統的な知的活動とジェンダーイデオロギーの積極的な批判、とされている(Swirsky & Angelone, 2016)。フェミニズムには「好ましい、セクシー、強気、自主的」等ポジティブなイメージと「望ましくない、地味、頑固、怒り」等のネガティブなイメージがある。人はこのようなポジティブな面やネガティブな面に接することによりその人の見解が形成されると言われている(Redford et. al, 2016)。

3.2 選挙権

日米に於ける職場での平等権を見てみるとアメリカでは1963年に男女平等に給与を与えるという法律ができたが、日本の場合は雇用機会均等法が制定されたのは1986年と職場に於ける平等権は遅れていることがわかる(U.S. Equal Employment Opportunity Commission, 2018)。

3.3 政府への女性議員進出

アメリカは、世界で100位、歴史的にみても日本は158位と日本の方が女性の国会議員数が少ないことが歴然としている(Inter-Parliamentary Union, 2018)。日米ではどのように女性政府代表をみているかという点、両国とも女性が政治に参加することは社会にプラスになるという点では一致していた。しかし、アメリカでは女性政治家は女性市民の政治的関与を刺激し、女性の政治的知識を増やすことに貢献するという認識がある一方、日本では男性より道徳的に優れており、社会問題に焦点を当て改革に務めるが男性より政治的能力が不足していると考えられている(Campbell and Wolbrecht, 2006; Lee, J. & Lee, K., 2016)。

3.4 職場での平等権

職場での平等法により身長と体重の差別や働く母親への差別、女性の残業を認めなかったり等の問題が排除され女性の雇用率も上昇した(Bartlett, 1994; Economist, 2016; Vogel, 1990)。

3.5 生殖に関する権利

避妊ピルが承認されたのは、アメリカが1960年で日本は1999年だった。この避妊ピルが承認されてからアメリカでは子供を生む時期や結婚の時期等を心配せず、働くことができるようになり女性の雇用率もあがった。日本の場合は、避妊ピルが承認されても就業率も出生率にも変化はなかった。避妊ピルは肯定的に受け入れられたものの、日本の女性は健康や副作用への懸念が高かったようである(Bailey, 2006; Kihara, 2001; Negishi, 1999)。

4. 研究方法

4.1 調査の対象

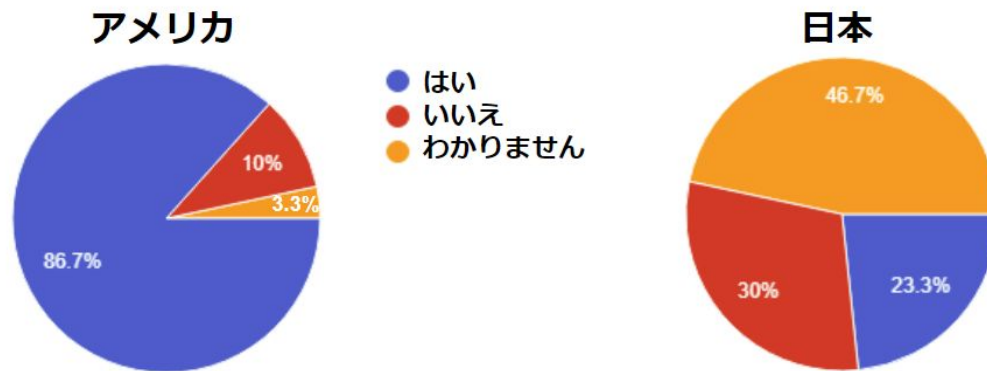
参加者はアメリカの女子大生30人、日本の女子大生30人、合計60人だった。

4.2 調査方法

アンケート調査用紙を日本語と英語で作成し、オンラインでデータを集めた。

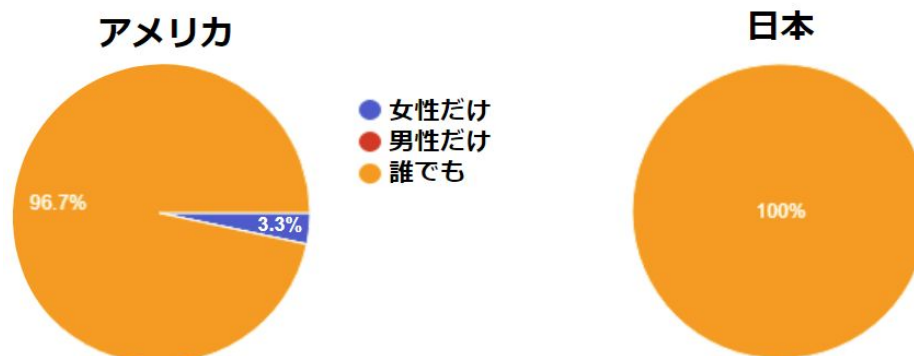
4.3 回答者

図1：あなたは自分をフェミニストだと考えますか



回答者に関するデータをまとめてみた。まず、あなたは自分をフェミニストだと考えますかという質問に対してはアメリカの女子大生は日本の女子大生の約4倍自分をフェミニストとして識別していることがわかった（図1参照）。

図2：フェミニストと呼べる人、又フェミニズムを促進できる人は誰ですか

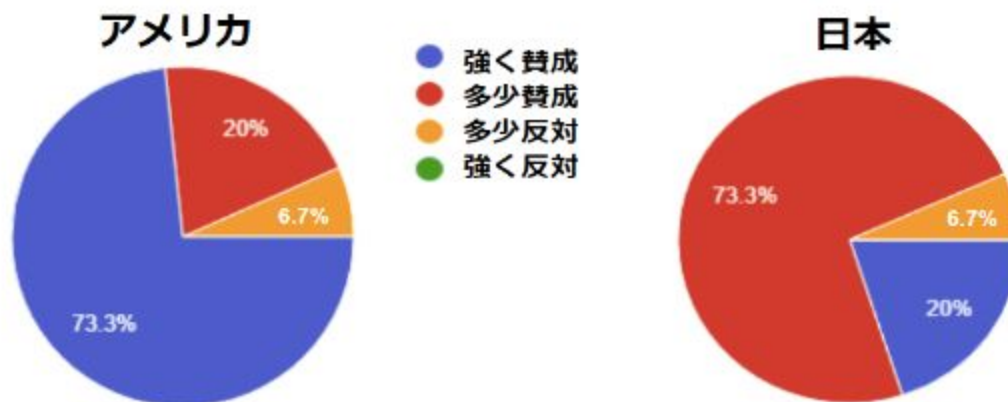


フェミニストと呼べる人、又フェミニズムを促進できる人は誰ですかという質問に対しては両国の女子大生は、誰もがフェミニストになることができる、あるいはフェミニズムを促進することができることに同意していた（図2参照）。

5. 結果

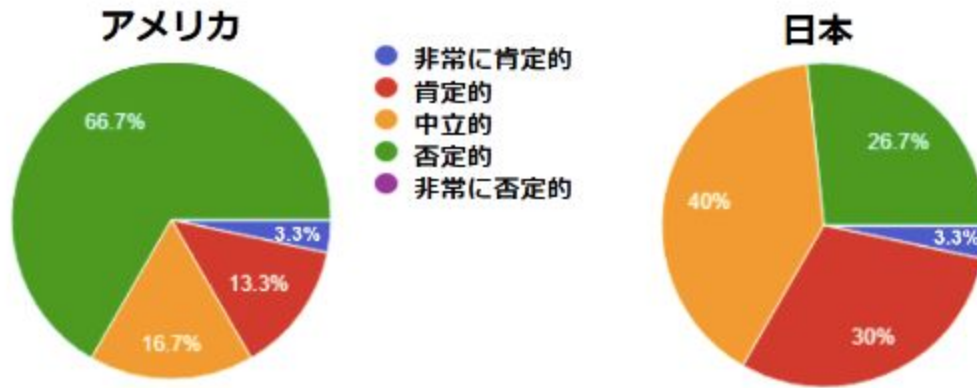
5.1 研究質問1：女子大生はフェミニズムについてどのように認識しているか。

図3: あなたは、フェミニズムが女性の自尊心に対して影響を与えていると思いますか



あなたは、フェミニズムが女性の自尊心に対して影響を与えていると思うかと言う質問に対して、アメリカと日本の女子大生共にフェミニズムが女性の自尊心に対して良い影響を与えていることに同意していた（図3参照）。

図4: あなたは「フェミニストであること」がどのように認識されていると思いますか



あなたは「フェミニストであること」がどのように認識されていると思うかという質問に対して、日本の学生はフェミニストであることは肯定的でもなく否定的でもないと考え、アメリカの学生は否定的に見られると考えられている（図4参照）。

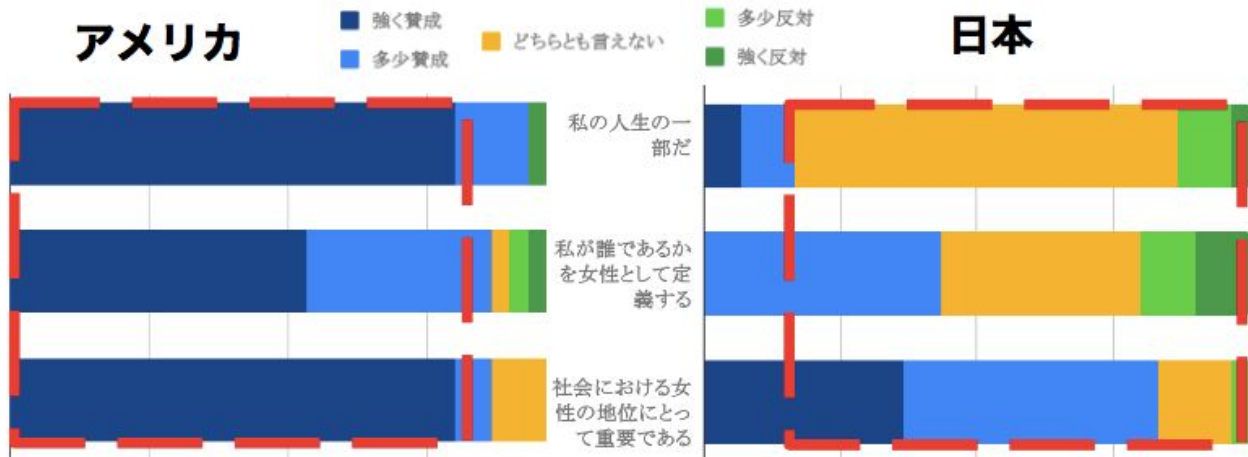
図5:あなたにとって、フェミニストとは何か



あなたにとって、フェミニストとは何ですかと聞いた結果とても興味深い結果が出た。日本の学生の場合は男女平等、女性の権利、強い、わからないという語彙があった。一方、アメリカの学生の場合は「強い、自主的、平等、反抗的、率直」等の語彙が出ていた。このワードクラウドから日本人の女子大生はフェミニズムは男女平等に関する

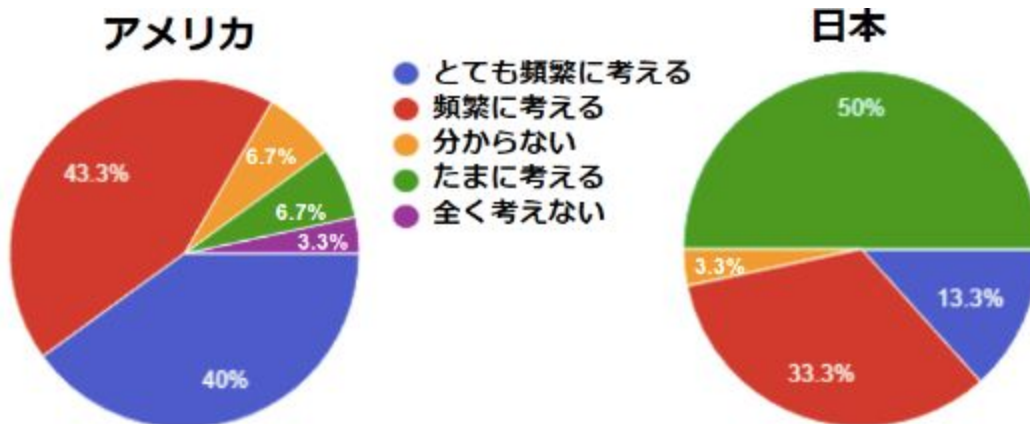
るものとする一方、アメリカの女子大生は個々の女性の自主性と平等を強く主張し、女性の不利な状況を変えていこうという前向きな姿勢が伺われる（図5参照）。

図6: フェミニズムについて以下の項目についてどう思うか。



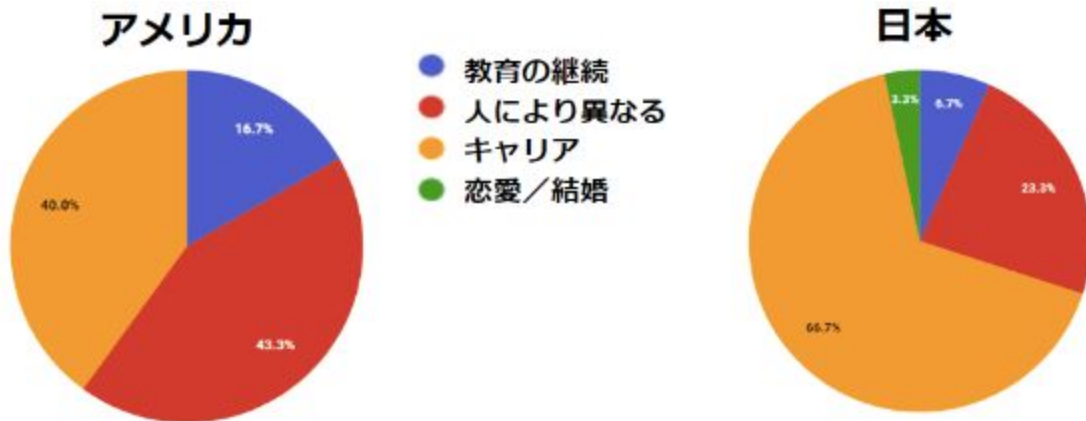
フェミニズムに対して日本とアメリカの学生はどのように思っているかだが、ほとんどのアメリカの女子大生は日本の女子大生とは異なり、フェミニズムは人生の一部であると考えていた。またアメリカの女子大生の方が、フェミニズムは自分が女性であることを認識するものと答えた人が多かった。そして、両国の学生はフェミニズムは社会における女性の立場にとって重要であると答えた（図6参照）。

図7: 女性の持つ権利の向上について、どの位の頻繁で考えるか



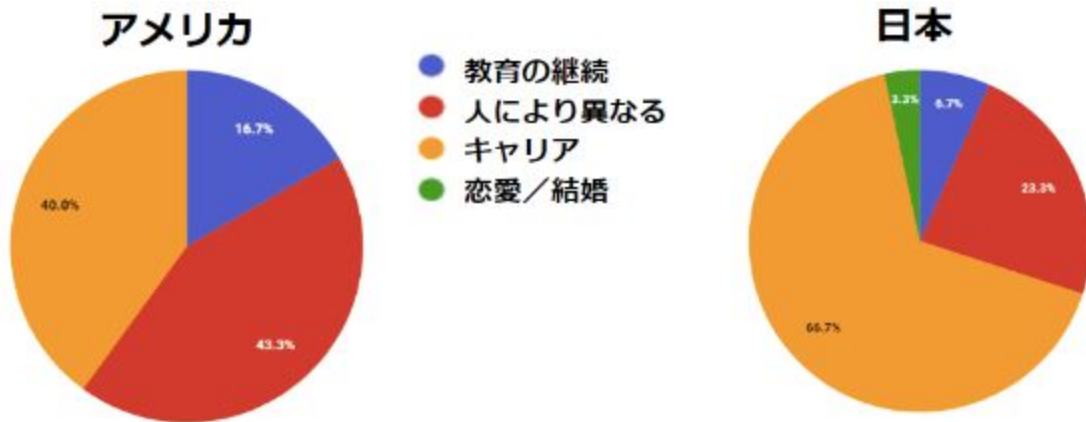
この女性の持つ権利の向上について、どの位の頻繁で考えますかという質問では、日本人の女子大生の答えは分かれているが、アメリカ人の大学生は女性の持つ権利向上について頻繁に考えていることがわかった（図7参照）。

図8: 大学卒業後女性が第一優先すべき項目はどれだと思うか。



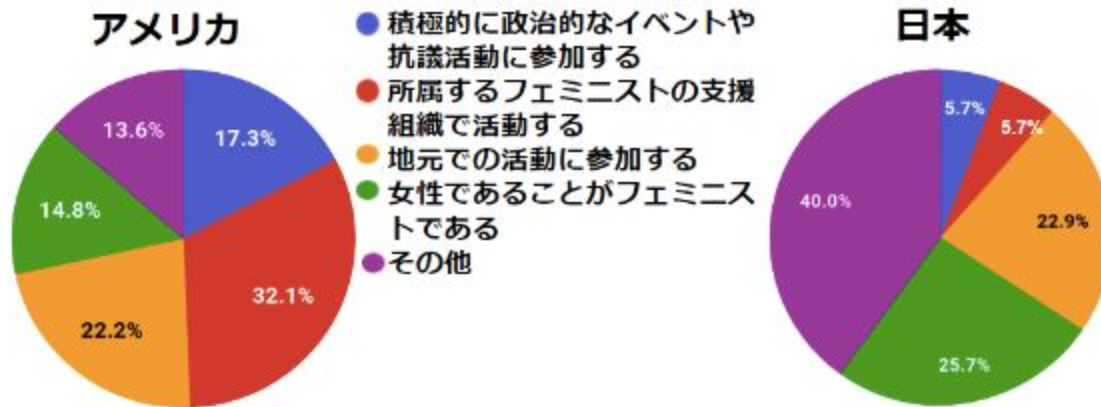
次に、教育の継続、人により異なる、キャリア、恋愛、結婚の中で、大学卒業後の女性が第一優先するのはどれだと思うかという問には、日本の女子大生は「キャリア」を重視しているが、アメリカの大学生は「キャリア」と「人により優先するものが異なる」という意見にわかれた（図8参照）。

図9: あなたの国では、フェミニスト運動はどのくらい効果があるか。



あなたの国では、フェミニスト運動はどのくらい効果がありますかという問にはアメリカの73%が効果的だと感じているのに対し、日本の女子大生は、フェミニズムの影響はほとんど中立（56%）または効果がない（40%）と考えていることがわかった（図9参照）。

図10: どのようにフェミニズムに参加したいと思うか。



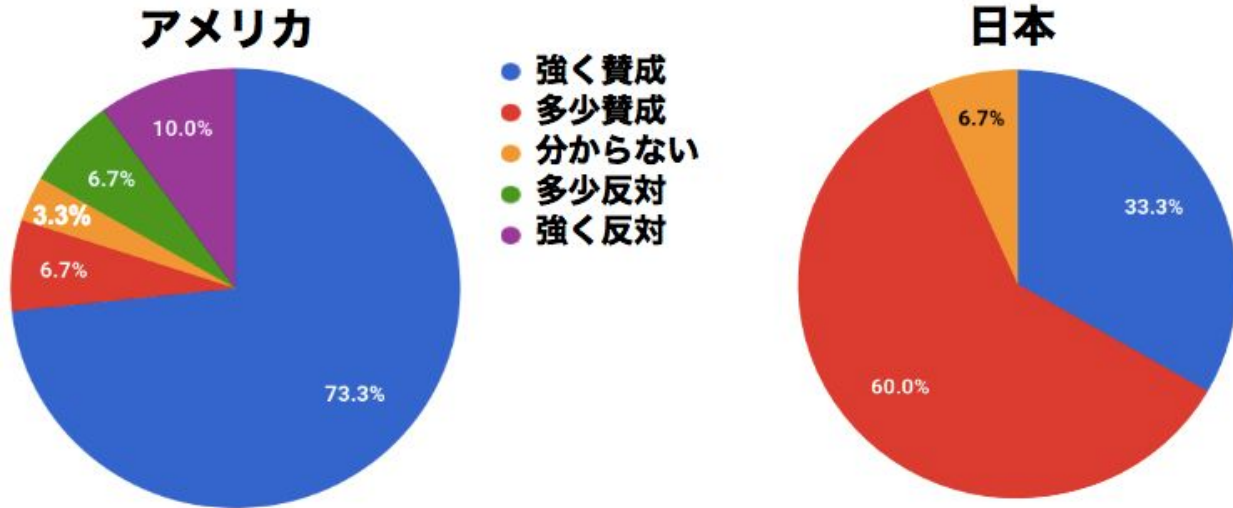
どのようにフェミニズムに参加したいと思いますかという質問にはアメリカの学生の大多数は様々な地域の組織に積極的に参加しているが、日本の学生の大多数は地域のスタイルのサポートを好むことがわかった（図10参照）。

5.2 研究質問1のまとめ

アメリカの女子大生は、日本の女子大生に比べて自分自身をフェミニストとして識別する可能性はるかに高いことがわかった。また日本の女子大生はフェミニストであることは肯定的でも否定的でもないと考える一方で、アメリカの女子大生はフェミニストが否定的な性質を持っていると感じていることもわかった。さらに大多数の日本の女子大生は、フェミニストの運動が効果的ではないと思っていることに対し、ほとんどのアメリカの女子大生はフェミニスト運動は効果があると感じている。

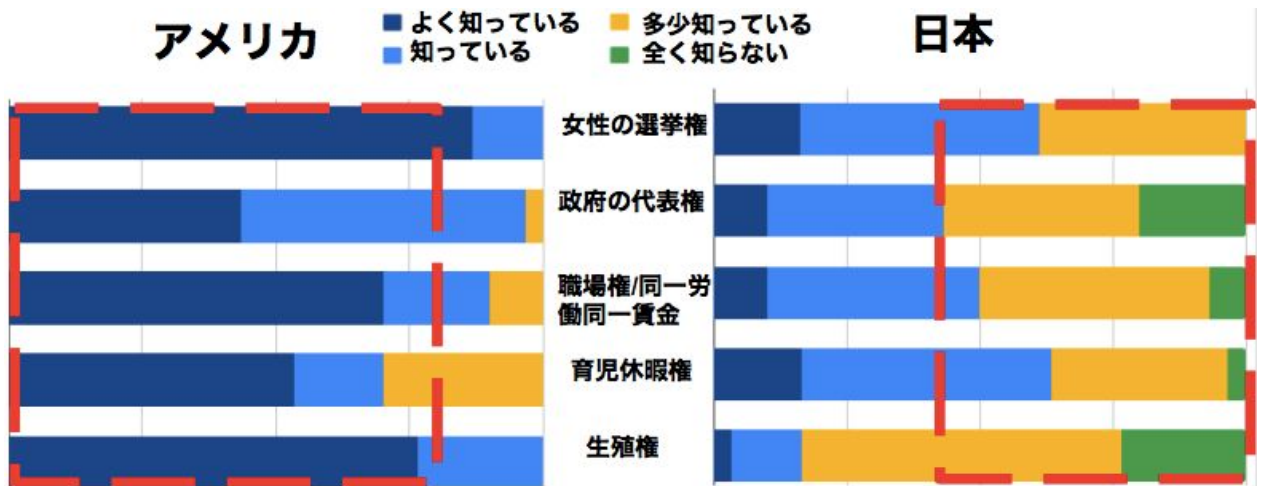
5.3 研究質問2：社会で女子大生が直面する平等の問題とは何か。

図11: 男女の平等には差があると思うか。



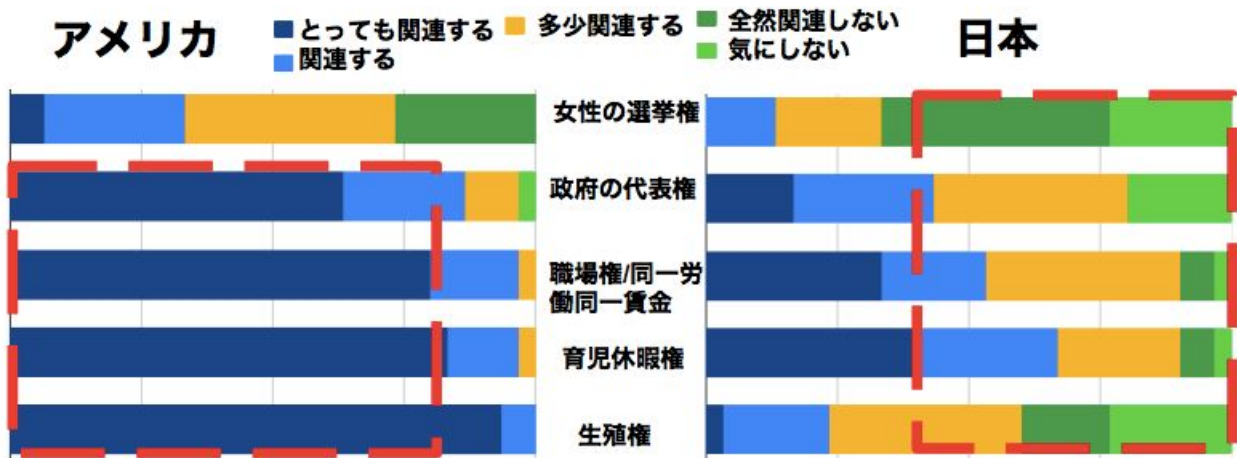
まず、男女の平等には差があると思うかという質問に対しては、アメリカと日本の女子大生の大多数は男女の平等権は異なると答えた（図11参照）。

図12: フェミニストの歴史における次のような大きな進歩について、あなたはどの程度知っているか。



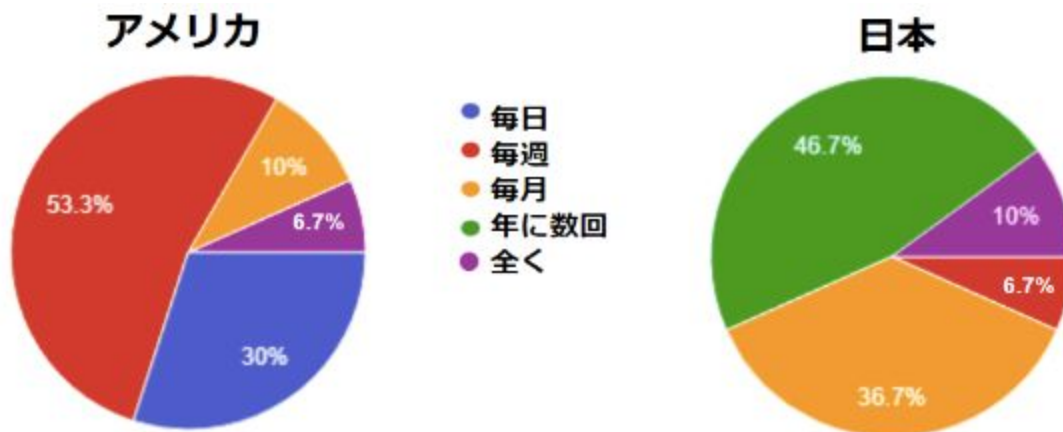
フェミニストの歴史における次のような大きな進歩について、あなたはどの程度知っているかという質問に対しては、アメリカの大学生に比べると日本の女子大生はあまり知識がないことが示された（図12参照）。

図13: あなたの国では2018年現在、下記の問題が残っていると思うか。



あなたの国では2018年現在、下記の問題が残っていると思うかという質問に対しては、日本の大学生の回答は一定しないが、その反面、アメリカの大学生は選挙権以外、様々な問題が残っていると感じている（図13参照）。

図14: 一般的に、フェミニストに関連した事項について、あなたはどの位頻繁に話すか



また、一般的に、フェミニストに関連した事項について、あなたはどの位頻繁に話すかに対しては、日本の女子大生はフェミニズムについての問題を年に数回話すか、アメリカの学生は毎週あるいは日常での会話で頻繁に話し合っていると答えた（図14参照）。

さらに、他のフェミニストの問題や男女平等問題などについて興味があるかという質問に対しては日本の学生は「男女で不揃いなのは仕方ないから無理に平等にしなくても良いと思う」。「なんでもかんでも平等にすることが、同じ権利を持つことではない」など、不平等にあまんじている面がみられた。しかしアメリカの場合はLGBTQやトランスジェンダーの権利等、女性、男性の平等より、さらにすべての人が平等であるべきだという意識があり、違いが顕著にでていた。

5.4 研究質問2のまとめ

日本とアメリカの女子大生は、現在でも男女に不平等があると思っていることがわかった。また、日本の女子大生は、アメリカの女子大生に比べると男女平等に関する進歩の知識が乏しいようである。その反面、アメリカの女子大生は男女平等に関する知識が豊富で、現在でも様々な問題が残っていると考えていた。さらに、日本人の学生は、アメリカ人の学生に比べて女性の権利について話す機会が非常に少ないこともわかった。また、アメリカの大学生は男女平等だけではなく、LGBTQも含めて人間としての平等について包含的に考えていた。その一方、日本の女子大学生の回答には男女平等とは男女を平等にエンパワーする必要性があると考えている大学生もいた。

6. 結論

フェミニズムに関して、日本の女子学生は主に男性と女性の平等に焦点を当てている。これはフェミニスト運動が日本ではあまり効果がないと思っているからではないかと思った。さらに、フェミニズムの問題は、アメリカでは男女平等の問題を超えLGBTQ等を含めたすべての人の平等に力を入れているが、日本ではまだそこまでの認識はないと思った。私達はカリフォルニアに育ち、男女平等に権利を主張することには当然の事のように思っていたが、日本の女性の意識の低さに驚いた。日本の女子大学生が男女平等に対してもっと積極的になるには幼少の時期から女性だけでなく男性にも平等の重要性を認識させる教育が必要だと思った。

7. 研究の限界点と将来の研究課題

最後に研究の限界点に関しては、回答者の数が少かったため結果は一般化出来ない点である。また将来の研究課題としては、この調査では女性だけに焦点を当てたので将来は男性の見解も含めて調査したい。またこの研究では追及しなかった男女平等権利、例えば、性的暴行人や種差別、インターセクショナルリティー、LGBTQの権利についても調べたいと思った。

参考文献

- Bailey, M. (2006). More Power to the Pill: The Impact of Contraceptive Freedom on Women's Life Cycle Labor Supply. *The Quarterly Journal of Economics*, 121(1), 289-320. Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/250987912>. doi:10.2307/1290002
- Christensen, K. M. (2012, January 5). Women's Suffrage in Japan in the 20th Century « Women Suffrage and Beyond. Retrieved December 06, 2017, from <http://womensuffrage.org/?p=389>
- E. Campbell, David & Wolbrecht, Christina. (2006). See Jane Run: Women Politicians as Role Models for Adolescents. *Journal of Politics*. 68.233-247.10.1111/j.1468-2508.2006.00402.x.
- Equal Pay/Compensation Discrimination. (n.d.). Retrieved February 01, 2018, from <https://www.eeoc.gov/laws/types/equalcompensation.cfm>
- Hains, R. C. (2009). Power Feminism, Mediated: Girl Power and the Commercial Politics of Change. *Women's Studies In Communication*, 32(1), 89-113.
- History.com Staff. (2010). 19th Amendment. Retrieved December 06, 2017, from <http://www.history.com/topics/womens-history/19th-amendment>
- Houvouras, S., & Carter, J. S. (2008). The F Word: College Students' Definitions of a Feminist. *Sociological Forum*, 23(2), 234-256. doi:10.1111/j.1573-7861.2008.00072.x
- IPU Archive - Women's Suffrage. (n.d.). Retrieved March 05, 2018, from <http://archive.ipu.org/wmn-e/suffrage.htm>
- Lee, J., & Lee, K. (2016). Gendered reactions to women politicians in Japan: The role of media use and political cynicism[PDF]. Keio University.
- Goldin, C., & Katz, L. (2002). The Power of the Pill: Oral Contraceptives and Women's Career and Marriage Decisions. *Journal of Political Economy*, 110(4), 730-770. doi:10.1086/340778
- Gordon, L., Henry, A., Cobble, D. (2014). *Feminism Unfinished*, 160-3 London: W.W. Norton.
- Bartlett, K. (1994). Only Girls Wear Barrettes: Dress and Appearance Standards, Community Norms, and Workplace Equality. *Michigan Law Review*, 92(8), 2541-258

- Milestones for Women in American Politics. (n.d.). Retrieved February 01, 2018, from http://www.cawp.rutgers.edu/sample/timeline?field_timelinegroup_tid=317
- Proportion of seats held by women in national parliaments (%). (n.d.). Retrieved March 05, 2018, from https://data.worldbank.org/indicator/SG.GEN.PARL.ZS?contextual=default&end=2017&locations=JP-US&start=1990&view=chart&year_high_desc=false
- Redford, L., Howell, J. L., Meijs, M. H., & Ratliff, K. A. (2016). Implicit and explicit evaluations of feminist prototypes predict feminist identity and behavior. *Group Processes & Intergroup Relations*, 21(1), 3-18. doi:10.1177/1368430216630193
- Swers, M. L. (2002). *The difference women make: the policy impact of women in Congress*, 1-26. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- Swirsky, J. M., & Angelone, D. (2016). Equality, empowerment, and choice: what does feminism mean to contemporary women?. *Journal Of Gender Studies*, 25(4), 445-460. doi:10.1080/09589236.2015.1008429
- The Gender Equality Bureau of the Cabinet Office (2002). Heisei 14 nenban danjo kyodo sankaku hakusho [FY 2001, Annual report on the state of formation of a gender equal society]. Tokyo: Zaimusyou insatsu Kyoku http://www.gender.go.jp/english_contents/about_danjo/lbp/index.html
- Title VII of the Civil Rights Act of 1964. (n.d.). Retrieved February 01, 2018, from <https://www.eeoc.gov/laws/statutes/titlevii.cfm>
- Vogel, L. (1990). Debating Difference: Feminism, Pregnancy, and the Workplace. *Feminist Studies*, 16(1), 9-32. doi:10.2307/3177954
- Women in Elective Office 2018. (n.d.). Retrieved March 05, 2018, from <http://www.cawp.rutgers.edu/women-elective-office-2018>
- Women in national parliaments. Retrieved March 05, 2018, from <http://archive.ipu.org/wmn-e/arc/classif010118.htm>